いわて三陸ジオパークを核とした地域復興戦略

伊藤英之

1．背景と目的

ジオパークとは，地球の営みによって形成された優れた景観や地質の他，地球の営みに関連するあらゆる地域資産（文化芸能，歴史なども含む）を有機的に結び付け，それらを活用し地域活性化を目指す自然公園を指す．

ジオパークに認定されるには，日本ジオパーク委員会（JGC）による審査をパスする必要がある．ジオパーク認定には，優れた地質遺産は不可欠であるが，それ以上にジオパークを核とした地域活動・経済活動の活性化が重要となる．

岩手県では，2010 年に「いわて三陸ジオパーク構想」が立ち上がり，2012 年度中の日本ジオパーク認定を目指して「いわて三陸ジオパーク推進協議会」が設立されたが，東日本大震災により活動停止を余儀なくされた．しかしながら関係機関の働きかけにより，2011 年 6 月から新たなジオパーク構想の検討が開始され，現在までに学術専門部会 3 回，一般を対象とした普及啓発イベントが 2 回開催されている．

本研究は，「いわて三陸ジオパーク」の日本認定の早期実現と，世界ジオパークも視野に入れたジオストーリーの検討を通して，地域復興戦略についての基礎研究と実践を推進している．

2．研究経過

2-1　ジオストーリーの検討

ジオパークを楽しむための観光をジオツーリズムと呼ぶ．ジオツーリズムを推進するためには，その地域の特性を一言で表すテーマと，地域の見どころを組み合わせたストーリーが必要となる．そのストーリーをジオストーリーと呼ぶ．岩手県沿岸は，リアス海岸に代表されるように従来から風光明媚な観光地として知られている．しかし従来型の観光では，その地形に隠された大地の成り立ちや，地域に根差した様々な文化や歴史，豊かな生態系などを堪能せずに通り過ぎていた観光客も少なくないはずである．ジオストーリーは，これらを有機的に結び付け，観光客が楽しめるようなツアーコース設定のガイドラインとなる．現在までに，ジオパークの見どころとなるポイント（ジオサイト）の選定は岩手県が中心となり抽出を開始しており，地域の文化遺産や歴史遺産を包含したストーリー作りを検討しているところである．

2-2 東日本大震災を踏まえた地域づくり

今回の巨大地震と津波は，プレートの沈み込みに伴う一連の活動であり，太古から行われてきた地球の営みの一部である．岩手県沿岸は，地球の営みを災害という形で実感できる世界的に見ても貴重なフィールドである．今回の津波では各地に数多くの津波遺構が残された．これらのうち，特に教育的価値が高いものや，災害伝承として後世に残すべき価値のあるものを保存し，ジオストーリーに組み込んでいく必要がある．様々な被災者感情があり，遺構保存に対するそれぞれの意見は理解できるが，地球レベルの巨大災害を学ぶことのできる貴重なフィールドを大切に保存し，自然の脅威と私たちの復興過程のすべてを全世界に発信することも大切である．津波遺構は瓦礫の撤去とともにどんどん失われている．現在残存している津波遺構のリストアップと保全を早急に行う必要がある．

3．今後の展開

ジオパークの活動は，地域活性化と密接な関係にある．ジオツアーのガイド養成やツアー等の企画・運営管理を行う組織作りや地元の理解を得る活動，さらにはビジターセンターの整備などこれから取り組むべき課題は山積している．しかしこれらの課題を確実にクリアして，地域復興に貢献したいと考えている．

伊藤英之
（いとうひでゆき）

総合政策学部准教授
専門：自然災害科学
火山学・災害情報学